チヤンバレン先生の想ひ出

立教大學教授　岡倉由三郎

チヤンバレン先生は明治六年五月の末に日本へ初めて來て、上京すると、直ぐ芝西久保の青龍寺に住居を定めて、日本語をお學びになつたが、翌七年の七月からは、當時築地に在つた海軍兵學寮の英語教師を奉職された。此の幾年かの教師生活の間に先生は眼病に罹つて一旦歸國されたが、眼がよくなると、やがて又歸つて見えて、それからは相當長く在朝されたのである。是等の事は、先般、日本文化協會で先生の記念會が催されたときに、曾て先生の御在朝中親しく教を受けられた人が詳細な思ひ出話をされて、其のお話が協會發行の小冊子に載つてゐるから、委しくは其れを御覽願ひたい。

私は大學で三年間先生の教を受けたが、先づ御講義を拜聽したのは「日本文典」の科目であつた。先生は日本語の言語學上の位置を明かにせられ、代名詞の語根の事、數詞の hi (fi)-fu; mi-mu; yo-ya, itu-towo の倍數對立の現象の事、動詞の活用の語幹 (Stem) の無變化 (Sak-a, Sak-i, Sak-u, Sak-e の類) の事、等々、當時は極めて耳新しかつたいろいろの問題を、諄々と示して下さつた。次にはアイヌ語と朝鮮語とを教へて戴いたのであつたが、アイヌ語は、日本語とは別の系統の語で、日本語に知られない受身の前置詞（例 a-wakka-tare, wakka は水、a-tare 酌まれる

tare 酌）のある事や、アイヌの數詞が二十を單位として物を數へ、例へば、七十を示すには（20×4）−10=70 の迂りくどい樣式を取ることなどを說明して下さつた。又朝鮮語については、日本語との構造上の類似が、いかにも深い事實を、理論と實際の兩方面から示して下さつた。更に琉球語が日本語の姉妹語か、但しは一つの方言かについても僕等に考慮の糧を與へられた。

先生のお眼は、私が敎を受けた時分に、もう隨分わるくなつてゐた。それは明治二十年の事と記憶してゐるが、かなり强度の近眼鏡をかけておいでになつた。又、御健康も餘りお勝れになつてゐるといふ方ではなかつたので、特別に身體を大切にせられた。先生は一生御獨身であつたが、それも或は健康上の理由からではなかつたらうかと想像される。併しながら、それ程お弱かつたにも關はらず、常に身體を大切にしながら、やはり熱心に研究を續けられた。これは殊に我々の敬服に堪へないところである。

眼がおわるかつたので、先生御自身での讀書は一日に二時間と限られてゐた。其のあとはそれぞれ人を傭うて、或は英書、或は獨逸書、或は日本の古典と云ふ風に、色々の書物を一定の時間讀ませて聽かれた。それゆゑ、日本の若い學生で、先生の侍讀を勤めた、謂はゆる "reader" も數々あつた。自分の記憶してゐる所では、本田增次郎君・上田敏君なども、それ等の中の一人であつた。

私は、先生の "reader" としては、先生に仕へたことがないが、日本語の文法上の疑義については、幾分お役に立たうと試みたことがある。上田萬年氏も、此の點、同樣であつた。それらの故を以て、先生は、御著の "*A Handbook of Colloquial Japanese*（1888）第二版本の序に、上田萬年氏と私との事を、"Both ornaments of the younger

school of Japanese philology" とお記し下さつたが、その御評語を完了し得たのが上田氏のみであることは、先生に對して、定に慚愧に堪へない。

先生が、どうして此のやうに諸國の書物を讀まれたのかと云ふと、それは自分の意見が固陋にならぬやうに始終努められる爲だつたらしい。つまり自ら意識して、人生觀、世界觀を正しく立てたいと思はれたのと、今一つには、先生は御幼時をフランスで教育され、それからイタリー、ギリシヤ、ドイツ、スペイン等の諸國に居られた事もあつて、限られた島國のイギリス根性の中ばかりで成人されたお方ではないので、從つて其の御見解も、世界的に、著しくお廣かつたのであらう。それゆゑ、純粹の英國貴族などが持つ善い所を持つておいでになつたと共に、少しも偏狹な所がなかつた。何でも有のまゝに眞實を眺めて、之を正しく考へもし、又、その考へた所を忌憚なく表明してゆきたいと云ふのが、常に先生の立場だつたやうである。それで、或る時などは日本の事を忌憚なく批判して書かれたのが偶ま日本人の自負心の如きものに抵觸して、その爲に一時は先生を誤解したやうな事もあつた。これは個人の上でも屢〻見受けられる所であつて、例へば大抵の人たちは、他人が自己の長所を褒めてくれる時には、如何にも其の通りであると肯定するが、反對に自己の缺點を指摘されると、假令それが好意に基く場合でも、不愉快な顏をする。又、卑俗な話であるが、我々が寫眞をとる時に、低い鼻が高く寫ると、何等の苦情も申立てないのに反して、有のまゝにホクロ一つまでも寫し出されると、却つて其の寫眞師の修整技術の拙いことを非難する。斯ういふ態度は、人間らしいと評すれば評されるかも知れないが、正當な立場から考へると、甚だ遺憾な事である。我々として、いつでも大切なのは、自己の姿を他の者が何とか批評した時には、虛心坦懷に之を受取つて、さう云ふ見方もあるのかと深く

自ら反省し、好い批評に對しては益々其の讃頌された點を善くするに力め、惡評に對しては其の不德を顧み責めて改めるだけの謙讓の態度を取る事である。そして此の事は必ずしも個人的な私事に限らないのである。然るに昨今一部の日本人の中には、自分の國のえらさに目覺めたのであるか、或は目覺めんとしてゐるのであるか、とにかく稍謙虛を缺く態度を示す者があるらしい。

時代は違ふが、先生が誤解を受けられたのも、やはり其の邊の事情から來てゐる。チヤンバレン先生が永遠に日本を去られたのは、明治四十四年（1911）の三月四日であつたが、その翌年に *The invention of a new religion* の題名で、日本武士道の事などを批評せられた。其の事が圖らず日本の或る一派の人々には甚だ不快に感ぜられたのである。それと云ふのも、前に申した通り先生のお書きになつたものは何れも忌憚なく筆を進められてあるからで、或る一派の人々の必ずしも喜ばない此の種の記事は、右の外にも、先生の著書又は論文の中には、彼處此處に散見せられるやうである。けれどもさう云ふ種類の批評をも他山の石として受取るだけの雅量を持つことは、大國民の襟度であるかと思はれる。先生の批評態度は右の如くであるが、その底意はどうかと云ふと、明治六年から殆ど半生以上に亘つて日本に居を占めてゐられた事から觀て、寧ろ日本を第二の祖國として愛する側の一人であつたらしく、晩年になつて屢々私に賜はつたお手紙の端々にも、さうした心持がよく窺はれる。明治三十七年、日露戰役の勃發當時、自分はドイツ留學中であつたが、その二月二十八日に賜はつたおたよりの中にも、次のやうな一節がある。

I am, for the second time, spending the winter at Yokohama. Last year I secured here a German to read outland to me; this time I have a yong Frenchman, in addition to the permanent services of the

young Japanese who reads English to me. Otherwise, there is nothing to tell of myself, as I go nowhere owing to my indifferent health. Of course men's thoughts are absorbed by the war. All the Anglo-Saxon residents are enthusiastically pro-Japanese. I rejoice to see that the Germans, too, are now converted to that view, more or less. Evidently, "nothing is so successful as success."

I have been interested by Mr. Sasaki Nobutsuna's poems entitled "*Omoi-gusa*". That sort of *shin-tai-shi*, in which the spirit is new, but no uncouth foreign forms disport themselves, appeals to me.

「成功に優る成功なし」の語を引いて、日本軍の遮る者もない猛勢を説かれたあたりは、如何にも痛快である。又、先生はバタ臭い詩歌がお嫌ひらしい事が、此の一文で窺はれる。先生の *Things Japanese* の中には、その事がもつと手きびしく書かれてゐる。

又、明治四十四年の三月三日、即ち先生が第二の故郷として明治六年以來、親しみ、愛し、且つ敬して來られた我が日本の地を、永遠に立去られた前日に、横濱から私に次のたよりを賜はつた。

Yokohama, 3rd March, 1911.

Dear Mr. Okakura,

Your visit to-day and the charming gift which you brought me from ten of my old pupils were indeed a delightful surprise. It is pleasant to find myself thus remembered and appreciated after the lapse of many years. Pray convey to your nine associates, together with my warmest thanks, my best hopes for

their happiness and success.

With the same to yourself,

I remain,

Yours sincerely & gratefully,

Basil Hall Chamberlain.

(Permanent address:
℅ Lloyds Bank,
222 Strand,
London, England)

私はその日に、かねて先生の教を蒙つた上田萬年、三上參次、高津鍬三郎、渡邊董之助、林曾登吉、和田萬吉、白鳥庫吉、磯田良、佐々木信綱などの方々に、自分を加へて、以上十名の代表として、銀製の置物を先生に捧呈の爲横濱のお宿をお訪ねして、永のお別れを申したのであつた。

先生は、ヨーロツパに歸られてからは、御健康のお都合上、御生國のイギリスに御住居が適はせられず、スヰスのGeneva の地がお氣に召して、そこに落ちつかれ、遂にそこで逝かれたのであつた。

先生が本年（1935）二月十五日、八十五歳の高齢で逝去された事を承つて、先生の御薫陶を受けた者が皆打寄り、先生の日本を世界に紹介せられた偉業と、日本に關する忌憚ない批評とを振りかへり見て難有く感じ、先生の爲に記念の會を催したのは、日本としても定に然るべき立場であると、弟子の一人として考へる。（終）